

「水が浦の段々畑」

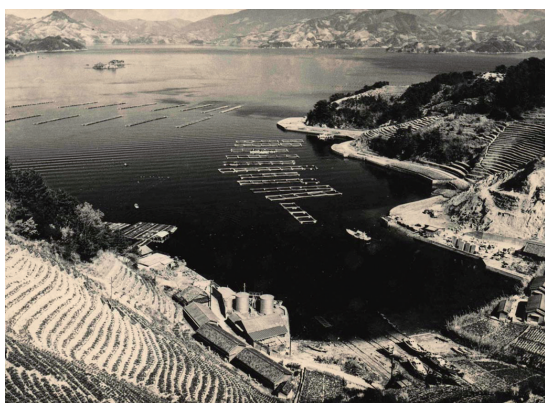
愛媛県宇和島市

水荷浦は、魚類養殖とその養殖管理で知られる遊子地区の集落で、宇和海に突き出た三浦半島にある。この地域では、段々畑又は段畑と称し、「耕して天に至る」の例えどおり、段畑に行くことを「そらに上がる」とも言う。かつては、三浦半島、南予一帯に段畑が開かれていた。

段畑の利用は、時の経済・農業事情とともに、地区の漁業の盛衰に伴って変化してきた。水荷浦はイワシ網が盛んな地区で、17世紀初めには大網、小網と称すイワシ網の存在が記録されており、食料自給のために段畑が開かれていたとみられる。18世紀半ばの甘藷の伝来やこの頃からの長い不漁に伴い、甘藷栽培を目的に本格的に段畑が開発された。天保年間に入るとイワシの豊漁期を迎え、人口の増加を支えるために段畑の開発が進み、明治維新の時には水荷浦の山林は殆ど開かれていた。このころの水荷浦の経済はイワシ漁と甘藷作により成り立っていたが、明治中頃からイワシの不漁期になり、甘藷に重点が置かれ、さらに、養蚕が盛んになり、良い桑園にするために段畑の石垣化が進んだ。しかしながら、昭和初めの経済恐慌により生糸の需要は一気に減退し、地区の経済は壊滅的な打撃を受け、段畑の桑園化も急速に衰えた。その後、食料増産のために甘藷畑となり、甘藷切干の生産を経て、柑橘園や馬鈴薯畑に転換された。水荷浦は季節風が強く、柑橘に向かない反面、無霜地帯で馬鈴薯の栽培に適し、この馬鈴薯の栽培が今日まで段畑が残る一つの要因となっている。昭和40年ころから養殖の時代に入り、馬鈴薯の栽培、段畑の利用も減少し、9.7haあった段畑は、平成7年には1.6haに減少した。平成12年には、段畑を守り、環境や景観を保全するため、有志により「段畑を守ろう会」が結成され、平成18年には約4.0haが耕作されるまで回復している。



昭和30年代の水荷浦(宇和島市 早見氏撮影)



段々畑と養殖施設

【参考資料】宮本春樹「段畑からのことづて」創風社出版 愛媛県HP

みどころ



- 魚見の丘公園：水荷浦の入口の高台にあるこの公園には、魚貝藻類の供養塔があり、丘からは養殖いかだの並ぶ宇和海、水荷浦の街、段畑が一望できる絶景スポットになっている。
- 漁港見学：段畑のすぐ近くにある遊子漁協ではタイやハマチの出荷が行われ、活気に満ちた漁港を見学することができる。